



尻別川の未来を考える オビラメの会

OBIRAME RESTORATION GROUP
NEWSLETTER Feb. 2014

42

「イトウを持続可能な社会のシンボルに」片山健也ニセコ町長が拠点構想



パネルディスカッションで「オビラメの会の活動をニセコ町の環境教育に役立てたい」と語る片山健也ニセコ町長。2013年10月12日、ニセコ町民センターで、足立聡氏撮影。



オビラメの会主催のパネル展「幻の巨大淡水魚イトウ / 尻別川からのメッセージ」がニセコ町（2013年10

月12～17日）と東京・新宿（2014年1月15～19日）で開かれ、合わせて約800人が来場しました。（p4に関連記事）

両会場でのパネル討論会には、片山健也ニセコ町長がパネリストとして登場しました。片山町長はオビラメの会のイトウ保護活動を高く評価。ニセコ町が尻別川を舞台とした環境教育に特に力を入れていることを紹介したうえ、「わが町の環境教育にオビラメの会の活動をぜひ生かしたい」と述べました。さらに具体案として「ニセコ町内にひとつかふたつの支流をきちっと指定して、世界に発信できる環境学習の場にしたいと思っています。そこにイトウが繁殖に遡上してくる姿があれば、おもしろい。まさに持続可能な社会のシンボルになるんじゃないでしょうか」と新しい構想を披露しました。

オビラメの会はかねて、ニセコ町有島地区の「有島記念公園」内を流れる尻別川支流のそばに第3のイトウ飼育拠点の設営を計画し、2014年中の建設に向けて同町役場と協議を進めています。

昨季の繁殖は不首尾？ 俱登山川イトウ稚魚 生息状況調査報告

川村洋司 北海道立総合研究機構、オビラメの会

オビラメの会がイトウ再導入実験を進めている尻別川水系俱登山川で、当会は2012年春、放流魚に由来する遡上親魚による再生産を初確認した。同年秋には稚魚の生息が確認され、このシーズンの自然繁殖は一定の成績をおさめたといえる。俱登山川では翌2013年春にもイトウ親魚の遡上と繁殖行動が確認された。そこで、再生産の成否を判定するために、同河川内でイトウ稚魚の生息状況を調査した。

方法

調査は2013年9月に実施した。昨年同様、俱登山川支流X川（再導入河川）の6地点、俱登山川本流の2地点において、エレクトリックショッカー（300ボルト、直流）を用いて生息魚類を採捕し、全個体を同定、カウントなどした後、再放流した（下図は調査地点の概略）。なお、産卵後斃死したサクラマス親魚（ホッチャレ）が確認された場合は「採捕魚」とカウントした。各地点の採捕区間はそれぞれ約50mである。

ト、直流）を用いて生息魚類を採捕し、全個体を同定、カウントなどした後、再放流した（下図は調査地点の概略）。なお、産卵後斃死したサクラマス親魚（ホッチャレ）が確認された場合は「採捕魚」とカウントした。各地点の採捕区間はそれぞれ約50mである。

結果と考察

各調査河川、調査地点別の採捕魚類を下表に示した（イトウおよびサクラマスは確認尾数、それ以外の種は確認・未確認で表示）。本年はイトウ稚魚の採捕は俱登山川本流のst.1での1尾のみで、昨年は多量に採捕されたX川では確認されなかった。

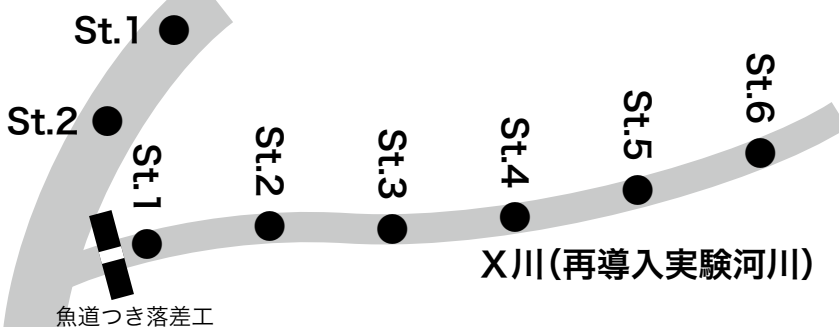
春期のイトウ産卵床は俱登山川本流では確認されていたが、X川

では確認されず、2013年はX川でのイトウの再生産はうまくいかなかった可能性が高いと思われる。

なおサクラマスについては、前年（2012年）の秋には本流で産卵が確認されたものの、X川では確認されず、本年（2013年）秋の調査でも幼魚（ヤマベ）は確認されなかった。したがって、2012年はサクラマスはX川で遡上産卵しなかったと推定される。

しかし本年（2013年）の調査では、X川の2カ所（いずれもSt.5）でサクラマスの産卵床が確認され、斃死雌親魚も2尾確認された。これらのことから、X川では初めて2013年秋、サクラマス親魚が魚道を越えて遡上産卵に成功したと判断された。

俱登山川本流	St.1	St.2
イトウ稚魚	1	0
サクラマス稚魚(ヤマベ)	0	1
サクラマス親魚	+	+
エゾウグイ	+	+
フクドジョウ	+	+
ハナカジカ	+	+
カワヤツメ	-	+



X川	St.1	St.2	St.3	St.4	St.5	St.6
イトウ稚魚	0	0	0	0	0	0
サクラマス稚魚(ヤマベ)	0	0	0	0	0	0
サクラマス親魚	-	-	-	-	+	+
エゾウグイ	+	+	+	+	+	+
フクドジョウ	+	+	+	+	+	-
ハナカジカ	+	+	+	+	+	-
カワヤツメ	+	-	+	-	-	-
スジエビ	-	-	-	-	+	-

+は確認、-は未確認

ポケットブック「ボくらイトウのレスキュー隊」が完成

「オビラメの会」制作の新しいポケットブックが完成し、11月25日に札幌市内で開催された「第4回北海道e-水フォーラム」（北海道、北海道コカ・コーラボトリング株式会社、公益財団法人北海道環境財団主催）でお披露目しました。

ポケットブックは縦横12cmのコンパクトサイズで、オールカラー24ページ建て。写真やイラストをふんだんに使い、尻別イトウやオビラメの会の活動について解説しているほか、繁殖中のイトウを静かに観察するテクニックや、キャッチ&リリースの際のパーブレスフック（カエシのない釣り針）の有効性なども記載しています。またすべての記事に英文訳を並記し、ニセコエリアを訪れるたくさんの海外ゲストたちにイトウ保護の重要性をアピールし



ています。

3000部を発行し、新シーズンの「見まもり隊」活動の一環として、イトウ見学者のみなさんに無料で配布することにしています。

このポケットブックは2013年度の「北海道e-水プロジェクト」の資金助成を受けて制作されました。

後志地域生物多様性協議会が保全活動計画を策定

後志地域生物多様性協議会（15自治体・団体、事務局＝黒松内町）は11月、「後志地域 地域連携保全活動計画」を策定しました。

「オビラメの会」は2011年の発足当初から、唯一の地域NGOとして協議会に参画。尻別川に生息するイトウ個体群

の保全・復元のための対策を活動計画に盛り込むよう、積極的に働きかけてきました。

完成した保全活動計画は全70ページあまり。後志エリアを「オシロココマやイトウなど、生きものの生息・生育環境が変化する境界にあたる地域として重要な地域」と位置づけ、これまで「オビラメの会」が地元自治体と協働実施してきたイトウ再導入事例を紹介したうえ、羊蹄山麓・尻別川流域エリアでの

今後の活動計画として、「イトウものぼる川づくり」「川の自然再生（イトウの生息環境の再生につながる河畔林や瀬、淵の再生）」などの項目が明記されています。

この保全活動計画は、環境省・農水省・国交省が所管する生物多様性地域連携促進法に基づく法定計画です。2014年度から具体的に各町村・地域でこの計画に基づく事業がスタートします。

in NISEKO

幻の巨大淡水魚イトウ
北海道尻別川からのメッセージ



イトウ学習の成果を披露する
倶知安小学校の児童たち(上)
とパネリストのみなさん(下)。
2013年10月12日、ニセコ町
民センターで、足立聡氏撮影。



草島清作さん
オビラメの会会長



川村洋司さん
北海道立総合研究機構



新栄裕さん
倶知安小学校



大野良輔さん
仕事人倶楽部



坂田潤一さん
「釣道楽」発行人



片山健也さん
ニセコ町長

高い関心に驚き

文・坂田潤一
季刊「釣道楽」発行人、オビラメの会



去る1月19日、ニセコ町の片山健也町長、オビラメの会の川村洋司氏・平田剛士氏と自分の4名で東京・新宿御苑のインフォメーションセンターにて行なわれたパネル展・シンポジウムに参加してきました。

パネル展は15日より開催しており、最終日の19日にシンポジウムが行なわれたわけです。

正直なところ来場者は関係者も含めて30人もいないだろうと考えていました。

が、いくら関東とは言えまだまだ寒い1月の中旬、しかも午前10時にシンポジウムがスタートという中にもかかわらず用意した50席では足りないほどの来場者があり驚きました。あらためてイトウという魚に

対しての関心度は決して低くはないのだと感ずることもありました。

川村氏による基調講演からはじまりました。

イトウという魚のポジション……属名がHuchoからParahuchoにかわった話から種名perryの由来。北海道においてのイトウの現況と生態……イトウが減ることになった要因のいくつかの説明や河川ごと、さらには支流ごとにその遺伝形質があり、それが重要であるということ。そして尻別川のイトウが大型であること。また、釣り人がイトウという魚に対して果たしてきている功績についての説明がされ、最後にオビラメの会が行なっている尻別川のイトウの保護対策方法……天然魚による自然繁殖を守ることを最優先に会で尻別川産のイトウか

ら人工再生産によるふ化放流(リスクに十分注意して)を行ないフォローするという二本柱で進めていて、それには地元住民のイトウに関する認識と協力が重要であり、また釣り人の協力も必要であるということでも締めくくられました。来場者の中からもっと聞きたいとの声もあるほどでした!

次に私がほとんど素人撮りのイトウの産卵シーンの動画映像を10分少々流させていただき、その説明をさせていただきました。いつもは静止写真を撮るのが仕事ですので、ほんとうに気まずい気持ちでいっぱいでした。それでも来場者からいくつもの質問があり、それなりに興味を持っていただいたのかな、といった感じでした。私のはあくまでもおまけです。



大勢の来場者を前にスピーチする「オビラメの会」の川村洋司氏(上)、平田剛士氏(下)。2014年1月19日、東京都新宿区の新宿御苑インフォメーションセンターで、坂田潤一氏撮影。

パネル展「幻の巨大淡水魚イトウ 北海道・尻別川からのメッセージ」は、公益財団法人河川財団の河川整備基金と、北海道からの助成と、ニセコ町・倶知安町・後志地域生物多様性協議会・尻別川連絡協議会・北海道・国土交通省北海道開発局小樽開発建設部・環境省北海道地方環境事務所の後援を受け、特定非営利活動法人仕事人倶楽部と共催しました。

次は平田氏による、オビラメの会の活動についてです。尻別川という存在とそこに生息しているイトウという貴重で大切な巨大魚の存在。そしてそれを守らなければならないという志を持ったイトウ釣り師たちの行動に共鳴し、共感し集まってきた者たちとの記録を詳細に説明されました。イトウという魚を守ることはもちろんだけれど、尻別川のイトウを守るためにやらなければならないこと……。川村氏を中心にまずは現状を知り、その解決策を考えることからはじめ、あくまでも尻別川の純血を守ることを念頭に一歩ずつ確実に進めてきたこと。そしてオビラメ復活30年計画という基本方針が立てられ、現在その中間期にきており、必ずしも計画通りに進んではいないが、例えば……

放流した稚魚たちが成魚になって産卵のために放された支流へ遡上するために障害となる落差工に魚道をつけるよう関係各所をお願いし、流域地元の方々とも連携し数年かけて5カ所にそれを設置することが叶い、完成翌年にはその魚道を遡上してきたイトウの産卵行動が行なわれ稚魚の浮上も確認された……という、確実にその効果がみえてきているということが説明されました。

そしてパネルディスカッションにうつりました。そこで、片山ニセコ町長は以下のようにお話になりました。「イトウを保護するということは）結果的には観光的な魅力もアップするとは思いますが、私たちは持続する社会をどうつくっていくかとい

うのが一番のキーワードだと思っていますので、きちっと次世代の子供たちに（より良い）環境をひきわたすことを一番に考えてイトウの保護に関わって行きたいと考えています」

拍手があがりました！ 片山町長カッコイイです！ 個人的にも感動しました！

そして最後には会場から、「イトウがたくさん釣れるようになって30年で解散ではなく、その後も地域全体で連携して自然保護、環境を守り続けて行くという意味でも素晴らしい理念を持っているオビラメの会には活動を続けていただきたい」との暖かい意見をいただきました。襟を正さなければならないですね。

以上、簡単なレポートでした。

河畔林伐採計画でイトウへの配慮を要請

国交省小樽開発建設部倶知安開発事務所（蘭越分庁舎）による尻別川での河川敷雑木伐採計画に対し、オビラメの会は12月、同事務所に「くれぐれもイトウの生息環境を壊さないように」と要望し、同事務所は工事の際の特段の配慮を確約

しました。計画では、工事現場は蘭越町名駒地区の尻別川本流左岸の砂州部分。洪水時の河道面積を確保するために、雑木林を伐採するという内容です。従来、このような工事の際は事業者からオビラメの会に事前

告知がありましたが、今回は知らせがなく、別ルートから工事情報が得られたため、蘭越分庁舎に事情説明を求めました。

オビラメの会は今後も尻別イトウの保全・復元のために、河川管理者など関係機関と綿密な連携を図っていく方針です。

環境自治体会議ニセコ会議で「オビラメ分科会」決定

5月22日から24日にかけてニセコ町で開催される「第22回環境自治体会議ニセコ会議／住民力による地域創造、そして未来再考～リゾー

ト地・ニセコから伝え継ぐもの～」（実行委、環境自治体会議、ニセコ町主催）で、オビラメの会が分科会のひとつをプロデュースすることが決定しました。



「オビラメの会」は新入会を歓迎します

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、入会希望と書き添えて、右のゆうちょ銀行口座にお振り込み下さい（手数料はご負担願います）。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末（5月）までです。おおむねひと月以内にニュースレターをお届けします。

■年会費 2000円
 ■ゆうちょ銀行
 02720-9-11016
 ■加入者名「オビラメの会」

会員のみみなさまへ
 2013年度の年会費納付時期を迎えています。手続きはお早めに。

WANTED

標識オビラメ見つけたら
 ☎ 0136-44-2472
 オビラメ事務局 マテ

オビラメの会ニュースレター 第42号(2014年2月発行)
 OBIRAME Newsletter No.42 February 2014
 ■発行 ■ 尻別川の未来を考えるオビラメの会
 ■編集 ■ 平田剛士
 ■印刷 ■ (株)須田製版(北海道滝川市栄町3-5-16)
 ■発送 ■ 吉岡俊彦
 ■口座 ■ ゆうちょ銀行 02720-9-11016 オビラメの会
 ■事務局 ■ 北海道虻田郡ニセコ町富士見65 吉岡俊彦方
 〒048-1501 TEL/FAX 0136-44-2472
<http://obirame.fan.cocan.jp/>
 ©2001-2014 Obirame Restoration Group

水と空気、みどりの大自然
 ニセコが好きだ
 楽しんだあとは川を語ろう

まぐろ屋十割

ニセコ町富士見 65 TEL/FAX 0136-44-2472
 Email / itou110@sa2.gyao.ne.jp